

トーレ・エツペの幽霊 スウェーデン

むかし。ある教会の中に、毎晩、トーレ・エツペという男の幽霊が現れました。それは、かさかさにひからびてミイラになつた幽霊でした。

近くの村に、恐いもの知らずの娘が住んでいました。ある晩、その娘に、村の仕立屋たちがふざけていました。

「もし、教会に行つて、トーレ・エツペを連れてきたら、何でも好きな物を買つてやるよ」

「ほんとう？じやあ、トーレ・エツペを連れてくるから、すてきな手織りの服を作つてよ」

「いいともさ」

仕立屋たちは、まさかほんとうに娘がトーレ・エツペを連れてくるなんて思いもしませんでした。ところが、娘は教会に行き、トーレ・エツペを背負つて帰つてきて、仕立屋たちの仕事台の上にすわらせました。

トーレ・エツペは、ぽつかり空いた大きな目で仕立屋たちをじつと見つめ、じりじりとはいよつてきました。仕立屋たちは、凍り付いて、娘にむかつてさけびました。

「お願ひだ。こいつを追いはらつてくれ。こいつを教会に連れもどしてくれ。そしたら、服をもう一着作つてやるよ」

娘は、すぐにトーレ・エツペを背負つて、教会に連れていました。ところが、もとの所にすわらせようとすると、トーレ・エツペは、両手で、娘をがつしりつかまえてしまいました。

「放してよ、トーレ・エツペ。」

トーレ・エツペはどうしても放そとしません。そして、しまいにこういました。

「今夜のうちに、谷川の橋の上に行つて、『ペールの娘、アンナ、おまえはトーレ・エツペを許してくれるか』と三回たずねてくれ。そう約束しなければ、放してはやらない」

娘は、

「ええ。いいわ。約束するわ」といいました。そのとたん、トーレ・エツペは、手を放しました。

谷川までたつぱり一マイルはありましたが、娘はまづくらな中を恐がらず歩いていつて、橋の上まで来ると大きな声でたずねました。

「ペールの娘アンナさん、あなたはトーレ・エツペを許してくれますか」

三回たずねるやいなや、川の中から女の声がして、

「神さまがあの人をお許しになつたのなら、私もある人を許します」といいました。

娘が教会にもどつてくると、トーレ・エツペが、返事をせがみました。

「あの女は、なんていった？」

「神さまがあの人をお許しになつたのなら、私もある人を許しますつて」

トーレ・エツペは大喜びしていました。

「ありがとう。では、日がのぼる前にもういちどここに来てくれ。礼がしたい」

娘は家に帰り、朝、日がのぼる前に、もういちど教会に行きました。すると、トーレ・エッペがすわっていたところに、銀貨が山のようにしてありました。娘は、銀貨を手に入れ、仕立屋たちからは新しい服を二着もらいました。

トーレ・エッペの幽霊は、二度とすがたをあらわしませんでしたとさ。

原話..『北欧の民話』山室静著／岩崎美術社
再話..村上郁(©)